デュルクハイム　藤戸正二譯

ますらをの道

理想社刊

ますらをの道

苦難の時代に處して發憤するの辭

[illegible]

「父は年老いて、をのこらは戰ひの庭にありき、再會を期しうるや、父は知らざりき、されば父は、子らに切に告げんと欲せることどもを書きとめたり、かくて死せり、こは百年餘りさきのことなり、子らは斃れ、小典は留められしが、程經て後、やうやく見出されぬ、ここにあることは、新しからず、されど、とはに眞なり、大丈夫（ますらを）こそこれなれ、これなくば、わが國はあるべからず、」

かやうなわきがきを添へて、古い手稿が私の手許に屆いた。私も之以上は、成立年代と者著に就いて、言ふべきことを知らぬ。だが、それは大したことではない。此の手記が、今もなほ、我々に語つてくれるのであるから。

エックブレヒト・フォン・デュルクハイム

千九百四十年一月　伯林にて

目次

ますらをの道

時々刻々、一日一日、大丈夫たること

は決して容易ならず、果して然りや否や、そは苦境に當り、犧牲と頑張りを爲さずんばあるべからずして、唯我一人なり、何人も我を顧みる者なく、弱氣起り之を克服せざるべからざるの時節にこそ、始めて知るべきなり、この秋にこそ、果して眞の大丈夫なりや、魂底にまことの力を有せるや否や、知るべきなり、

何人たりとも完全なる能はず、聖人君子たりとも、窮するの時あり、たるみあり、動搖あり、亦衰ふることもありぬべし、或は絕體絕命なる爲にか、はた憂深く惱重うして、遂に我が事了るとなすに至れるか、或は單なる疲勞、悲哀、乃至不快の爲か、さては骨身に徹する疑惑來れるか、或は使命と義務餘りに重く、今はわが力及ばずと嘆ずるに至りしか、

然りと雖も、かかる時にこそ現はさずんばあるべからざるは、男兒本來の面目なり、窮境を一貫して我を支ふべきもの、卽ち確乎たる志氣と明晰なる頭腦と敢爲なる心膽と强烈なる意志なり、名譽の正しき行持なり、一切に打ち克つ金剛力なり、

こは求めずして得らるべきものに非ず、こは實踐せずんばあるべからず、贏ち得ずんばあるべからず、護持せずんばあるべからず、

胸裡に金剛力を持てる大丈夫の姿宿る、身心を擧して生き、名譽と國と神の爲に耐へ拔く金剛力なり、

汝等、是の姿をこそ護念すべきなれ、

我は之を自ら體驗せり、さればわが體驗より知れる限りのことを、今玆に、汝等の爲に書き記さむ――苦難の時代に發憤するの辭を記さむ、

大丈夫は

神の士なり、國士なり、名譽の士なり、同時に之等總てにして、又一卽他なり、大丈夫は神の士としては神に、國士としては國に、名譽の士としては已が名譽に奉仕す、然も三者は全く一に歸す、何となれば

名譽は、彼が神に齋きまつろひ、彼の國に奉公なす時にのみ、之を搖ぎなく保持するを得べし、

國は、彼が神に隨身し奉り、已が名譽に微塵の汚點をも止めざる時にのみ、眞に之に奉公なすを得べし

神は又、彼が名譽と國のために萬事を捧げ盡すときにのみ、現世に於て神に齋きまつろふを得べし、

大丈夫の行履、實に斯くの如し、

その立つや、山嶽の如く、毅然たり、確乎たり、その動くや、ことごとに明らかに潔し、大丈夫はわれに託されたる事のみを思ひ、身を顧みること無し、清明き心もて、ひたすら質朴に生活す、おのが身内を愛し、義務を行ひ、職分と事業に默々として務めて熄まず、その生活態度には、純乎たる眞劍味と泰然たる信念あり、

その志を立つるや堅牢不拔、その道を進むや直進不退、忠誠にして、疑懼せず、嫉妬せず、善惡の道を辨へ、おのが信仰に挺身し、戰場にあつては勇猛敢鬪、死に面しては平然歸するが如し、

大丈夫の生命は私の物ならず、

彼は之を主なる神に捧げまつり、國と名譽に奉仕せしむ、

大丈夫はげに斯くの如し、

名譽の士

大丈夫は毅然として名譽を堅持す

斯くして大丈夫は、剛健にして溫良、且つ公明なり、

わが國、わが家、わが職分、わが人格の自由など、總じて神おんみづから大丈夫に、是を守れよ、この本義を成就せよとて、忠誠と信仰に對し委ね給ひしことどもをば、大丈夫はわが名譽に賭けて守護す、而してその名譽こそは、彼が己の生命を賭して護持する處也、

この故に大丈夫が名譽知らずと爲す所のものは、

己が生命を欣然として國に捧げざる者なり、

家を濟へ、家名の潔白を保つことを爲さざる者也、

職分を濫用なす者と己が仕事を賣る者と單に生きんが爲に自由を汚す者也、

總じて己が命を名譽より重しと爲す者を、大丈夫は名譽知らずと見做す、

されば名譽の爲ならば、動搖あるべからず、よしんば地位も糧も、妻も子も、家庭も身體も生命も、なべてことごとく失はれたりとも、

大丈夫は肺肝に銘ず、たとひ身は戰場に横ふとも、名譽を失はざりし者は、死して死せざるを、されど單に生きながらへんが爲に名譽をすてて顧みざる者は、死なり、死罪重々の亡者なり、げにや萬事は懸りて名譽にあり、名譽に依つて萬事は成り、名譽に依つて萬事は敗る、名譽無くば生くとも甲斐無し、

されば大丈夫は名譽の爲に生命を捧ぐ、

大丈夫は信賴を受く、その信賴、はかりつくすべからず、又所として受けざるなし、蓋し大丈夫は不誠實なる能はざるが故也、名譽を念ふが爲に不誠實なる能はざるが故也、

大丈夫は自由にして

己が自由に總てを賭す、

大丈夫の自由は、放縱乃至無爲の謂に非ず、大丈夫はその愛する人々の爲に、その職分とする處の爲に奉仕勤勞を行はんとして、自由なるを望むなり、正義の爲に鬪ひ、不義を懲らさんとして、自由なるを望むなり、

正義と認めしものの爲に戰ひ、服屬すべきものに全力を傾けて奉仕し、忠誠心の求むるがままに莞爾として死に赴く、斯くの如き底の、奉仕と戰鬪と忠誠の爲の自由、是ぞ大丈夫が自由の心境なる、

さて暇有らば、不易なるものに想を潜め、新なる力を結集し、美の中に神を求む、

斯くの如く、大丈夫の自由は、義務と制約を否む自由に非ずして、正義の制約を受けんが爲の自由なり、何の人生か、制約無からむ、然れども問題は、魂が何者に依つて自らを制約せりやに在り、果して

貴きものなりや、はたまた卑きものなりや、

さなり、何人たりとも、時としては卑しきものに惹かるることもありなむ、然れども、之を許容し、肯定し、怠惰と虚榮に驅られて享樂と權力を漁るものは、誤れる自由を求むる者なりと言ふべし、斯くの如き者は早晩病むべし、病むべきは、口に貴きものの制約を拒みつつ、然も人の子たる以上は、心にその制約を脫し得ざるが故なり、

貴き神と國と名譽とに結ばれ、萬事に於て貴きものに眞心を極め盡し、遂に胸中無一物の境に到れる者は、旣に自己を墮落せしむる桎梏を斷絕せるものにして、眞實自由なりと言ひつべし、

大丈夫は正に斯くの如し、

大丈夫、彼は生を樂しむ

又單なる外觀を輕蔑す、

大丈夫が生を好むは、その活力と滋味を愛するなり、彼の哄笑は不平家や老孃の脅威となるに足る、彼は力と充實を愛す、凡そ健實にして美なるを愛す、可憐と力強きとを愛す、而して眞澄の鏡の面にも似て、大丈夫は地の輝きを反映す、

彼は仕事を愛し、靜閑を樂しみ、急がず焦らず時間を活用し、故鄕を愛し、母性を敬ひ、祖先を追慕し、年若き人々の行路を助く、大丈夫は童の如くたはむれを好めども、嚴肅なるべき場合、乃至は生命を擁護すべき場合には、決してたはむるること非じ、又彼の心は、今生に於て彼をして眞理に近接せしめたるものを、感謝報恩の情もて追憶祈念す、

大丈夫たる者は、本質を重んじ外觀を却く、人間と事物に對してはその本質を直視し、事業に際しては堅實を尊ぶ、嚴として己が根幹に依つて立ち、おのが心底の誠よりして生活す、

事物にありてはその神髄、人間にありては魂に宿せる神像、是れ大丈夫の隨所に於て常に求めて熄まざる處なり、僞れるもの、洞ろなるもの、不純なる外觀、そは大丈夫が眼光を恐怖す、蓋し大丈夫は之を洞察せずんばやまざるが故なり、

外觀にも贋物にも、彼は惑はず、若し斯かるものが行く手を遮りなば、大丈夫は一擊の下に之を打破なすか、然らずとも之に拘泥せずして進む、蓋し彼自身は不斷に向上前進して滞ることを知らざるが故なり、げに是ぞ胸に生命の歌を唱じつつ聖智に鐙ほひて、生死を超えて神意を奉行なす騎士の姿なる、

大丈夫は明朗なる心境と

その根柢に於て常に自由なる情緒とを有す、假令生活の重荷を擔ふとも、なほ胸中深き處にては心平かなり、この深所に金剛力在りて彼を支ふ、又彼はこの深所より出でて萬事を負擔し克服す、

まことの明朗は眞摯なる正義心より出で、大丈夫の輕捷は神性の莊重なるに發す、輕佻浮薄と大丈夫の浩然の氣とは、似ても似つかず、何となれば浩然の氣は淺薄凡庸より來るに非ずして、胸中深く悠々たり、心神自若たる襟度と、何者と雖も搖がし得ざる不敵の豪膽とより生ずるが故なり、

大丈夫の魂の堅實なる生活力は絶大にして、肉體に宿る死の恐怖と雖も之に依つて消滅す、かつ又大丈夫は知る、よしや何事の襲ひ來らんとも、最深の中心に迫ることは斷じてあるべからざるを、されば彼は運命を歡迎し、眞摯にして明朗なる態度を以て運命を捕ふ、又兎まれ角まれ必ずや運命を制御せんてふ、泰然たる確信を常に失はず、

大丈夫の淸明心は、他人の生活を羨み、他人の不幸を喜ぶことを知らざる、至純なる眞心に出づ、彼

の笑ひは決して他を傷くることなく、善良にして囚はれし處なければ、聞く者も亦心自ら樂し、その聲には猜疑と傲慢より生ずる惡しき響なし、

大丈夫の淸明心は本質的事物への信倚より來る、かるが故に彼は本質的ならざる事物を、さほど眞劍に執り上ぐること能はず、よし斯かる事物が恰も重要事なるが如く裝ひつつ、來りて彼を脅し、威猛高に振舞ふことあらんも、彼は之を一笑に附し、更に意に介することなし、

淸明心は靈魂の鏡にも譬へつべし、その面を觀ずるに、高きものは恰も星滿てる蒼空の如く、一切の小事物の上に懸れり、大丈夫の魂は滿々たる確信を懷きつつ、人生に於ける諸々の小暗影を解脫して、不易なる事物のいと高き光明界へと飛翔す、

されどまた、絕大なる悲痛の彼の生活に入り來るあらば、心の內奧より宥和の力湧き出で、苦澁を除き、悲痛を轉じて、確乎たる眞劍味と新しき信念と爲さん、

大丈夫たる者は沈着なる一隻眼を有す

此の眼は早急に物事を看過せずして、平靜に一事より他事へと移行す、右顧左眄を爲さずして、沈着に、ひたむきに人生を正視す、鬼火の如く點滅せずして、確實に、暖く、瞭かに輝く、

此の眼は單なる肉眼には非ず、我らが生活の患ひなる焦躁と冷淡と混亂よりも、更に强き力より內湧する心眼なり、

靈魂に內在するこの力こそは、大丈夫に立處を與ふるものにして、彼はこの立處に據り、をめず臆せず、悠然として世界を達觀す、其の樣平靜かつ沈着にして、人間なると事物なると、喜びなると惱みなると、はた生死なると、その何たるかを問ふことなし、彼が一隻眼の靜觀力は極めて大なれば、他の人人にも遷移して、彼等が胸裡の不安を除く、

その生活虛榮にして枝葉末節に囚はれし者の眼は、點滅動搖す、何となればそははかなきあだし心より出で、外觀を糊塗せんとするものにして、無常の假相に執着せるが故なり、大丈夫は本質に立脚して

確乎不動、眞理を志とす、されば彼の眼は沈着なり、蓋しそは不動心より發して不易を志して進み、不純の外觀を看破し、諸人をしてひたすら眞理に嚮はしむるが故なり、

小心者の眼は冷にして險、心大いなる者の眼は溫にして充てり、大丈夫の心は彼自身よりも更に大なり、そは他人をも我と共に抱擁す、そは大丈夫をして胸襟を開かしめ、諸人の奮鬪と困窮と苦惱とを、わが事として同感せしむ、大丈夫が己れの感情を表現するは、援助を爲し得る時に限られたり、されど彼の眼のみは絕えず彼が感ずる處を溫和に映し出だす、而して既にこの眼のみにて、緩和と援助たるに足れり、

大丈夫の意志は不動の基礎を有し、彼が行藏の法則は確立せり、よしや何事の來らんとも、彼は名譽の要求と國家の要請に從ひ、又神の定め給ひし所に從ひて、行爲し持久すべし、斯くの如くなれば、彼が内に安んずる所あるが如く、彼の眼は戰友と敵の上に安らふ、明澄にして畏るる所なく安らふ、己れの欲する所を眼は知れるが故に、

神と大義に奉仕する大丈夫は

其の本質に於て常に質朴、其の生活に於て常に簡素なり、彼は奢侈を知らず、又自惚を知らず、

彼はおのが責務を遂行し、おのが身内の爲に配慮し、おのが道を進み、おのが事を行ふ、獨を愼みつつ、忠實に之を行ふ、

よしんば位階官職進みて他の上に昇るとも、大丈夫は常に自己の本領を失はず、常に人間たり朋友たりて、その忠誠を變ぜず、

彼は尊大の振舞を爲さず、又地位に負ふ處のものを誇らず、常に彼たり、唯々素朴にして自己に忠實なり、

かくて萬人感得す、この者は奉仕しつつありと、

大丈夫は正道を踐めど大言壯語せず、得々然たる徒輩を信ぜず、誇大の言辭を避け、節度を維持す、

凡そ心中に迫り來るものは、彼をしておほむね冷靜ならしむ、而して彼は至善の感情を集中するに一箇の明確なる意志を以つてす、されどこの感情が一度言行として發動することあらんか、正義の一念と化し、愛情と憤怒の爲、又彼が意欲する處の爲に、いつはりなく、ただ一筋に燃え上るなり、

もし一事に成功なすことあらば、大丈夫は、その成就せる事業と之を爲し得たるわが能力とをこそ喜べ、その得し人望は敢て之を欣ばず、大丈夫は人望を念頭に置かず、人望は既に備はれり、しかも我に從ふ者彌々多く、その勢力彌々大にして、彼は益々寡默謙讓、己が本質を裏切りて我ならぬ者に變ぜんとする誘惑に對し、益々志操堅固なり、

彼は常に彼たり、常に自己に忠實にして唯々素朴なり、

大丈夫は良き手を有す

大丈夫がこの良き手を汝に與ふることあらんか、そは盟約を爲すと等しく、據つて以つて磐石の如く恃むべし、而して汝は確固、淸純、善良、かつ明朗なる或る種の力を感ずるならん、

大丈夫の手は無雜作に善を行ふ、その樣、みづからは善行を意識せざるが如きものあり、そは手傷を治療し、苦痛を緩和す、ただ輕やかに撫で過ぎつつ、

是こそは萬物を、あたかもおのがじしなるが如く、大も小も、そのあるべき位置に移し行く良き手なり、而してこの手の觸るるところ、一切はその所を得るなり、

惡を懲らし、醜惡なるものを寸斷し、不義を打倒し、惡魔を助くる一味徒黨を惡魔のもとに追放せんとなすときは、良き手は峻嚴なり、

而も極めて平靜着實なるは、よき手なり、危險に直面すとも戰慄せず、後退せず、否寧ろ斯かる時に

こそ、断乎として堅持し、導き通し、擔ひ抜くなれ、

又良き手は逡巡なく裁断す、正邪善悪を決し、麥殼より藁屑を去り、外觀より本質を識別す、

良き手は克く剛にして克く柔、克く優にして克く決然たり、又潔白確實にして、飽く迄も忠實を失は

ず、

大丈夫たる者は言を愼む

彼は寡言にして大言壯語を爲さざるも、常に信念をもつて語る、言の物たる、神聖なり、之を濫用する者は一介の饒舌漢たるのみ、大言は大事の爲に用ふべく、而して至大の事物に就きては、之を語るよりも、寧ろ沈默を守るに如かず、

心底に奉持する所は之を談ずべからず、又恣に放談し得べきものに非ず、さればその資格無くして大事を談ずる者あらば、進んで彼が口を封ずべし、

己が胸に思ふ處をありのままに語り、その語る處に從ひて生活をなす所の、言行一致の士のみ、大事を談ずべき資格を有す、從つて汝自身は、汝の心中に充ちあふるるものあり、汝の生活に一致するものある場合にのみ、大言を敢てすべきなり、されど然らざらんには、言を發するに節度を失はざれ、乃至は全く沈默してあれ、

純眞にして充實せる胸より出づる言は偉大なる力を有し、心肝を貫く、斯かる言が純眞なる心焰を有する人々より出でて汝に到らば、直ちに汝の胸襟を開きて、この言をして火を點ぜしめよ、されど空言の徒來らば彼が口を封ぜよ、然らずんば汝の耳を蔽へ、

仕事にてあれ、信仰にてあれ

職分にてあれ、自由にてあれ、紀律を守ればこそ持續し、進步し行くものなれ、

大丈夫はわが身の紀律を維持す、斯くて彼は己が力を掌握して、自由の心境に在り、

一個人が飲酒乃至は喫煙を爲すや否やは、問題とするに足らず、されど彼が之等の習癖に淫せりや否やは、大いに問題とすべし、諸事亦斯くの如し、即ち吾人は自由の境地に立ちて能く諸事を愛すべきも、また克く之を放棄するを得べきなり、世相は千様萬態にして、快く愉しく享樂しうるもの尠からず、今吾人が之を利用攝取して、わが心を喜ばすに、何の憚りかこれ在らん、ただし吾人が之に囚はるれば、此の限りに非ず、大丈夫たりとも區々たる快樂を好む、されど彼は之を必要とせず、又必要と爲さざるが如く自戒す、是彼が自己の紀律を持する所以なり、

大丈夫は紀律に於て金剛力を有す、彼の無節制に走らんとするや、この金剛力によつて節度を保ち、亂に入らんとするや、之に依つて自制し、軟弱に流れんとするや、之によつて克く剛健たり、忍び難き

に際しても、之によつて我を失はず、ややもすれば放逸に陥らんとする衝動を之に依つて克服し、邪道の彼を誘惑すと雖も、之に依つて正道に踏み止まり、餘人ならば助けを求むるが如き場合に際會すとも、彼のみは我が身一つに負つて事に當り、將に中道にして挫折せんとする際に於ても、之に依つて頑張り通し、萬事崩壊に瀕すと雖も、之に依つて忠誠を守る、

この紀律は時機を失することなく錬成すべし、苦境に陥つて始めて之に着手するが如き事なく、平時より不斷に行持すべし、苦境に陥らば時機既に遲し、

されば大丈夫は豫ねてより紀律を練り、夙に之に着手す、彼は假令その要なき場合なりとも諦念を行ひ、事重大ならずと思はるる場合にも忽せにせず、事急迫せずとも自戒す、斯くてこの紀律の存する限り、萬事に拘はらざる自主獨立の境地に到り、我が身に隱れ備はりたる自制力を保全するを得べし、

斯くの如くにして大丈夫の內部に大いなる紀律生長し、其の力に依つて彼は未だ嘗て顚落することを知らず、又斷じて破廉恥乃至は不忠に陥ること無し、

大丈夫おのれに語りて曰く

（一）

よし汝、萬事休せりと思ふことあらんとも、尚大いに見込み有り、汝の斃れざる限り、その限りは見込み有り、汝が立てる限り、その限りは見込みあり、汝は汝自身爲し得べしと思ふよりも、更により以上を爲し能ふなり、されば、撓まず屈せず、貫き通せ、

己が力を越ゆる迄緊張努力せよ、斯く爲さば汝の力は增大せん、汝の日々の働きが汝の力以下に留まらば、汝の力は忽ちにして減少せん、而して事を爲すに當り、汝が身を顧みること無く、一途に仕事に念ずれば、汝の得る所更に大を加へん、

大丈夫はその奉持するところのことと、我に信倚する人々を想ふ、之によつて彼は力を倍加し、最後まで倒るることなし、蓋しこの事とこの人々とより、無上の力彼に來るが故なり、かくて彼は常にその全心全靈を傾注す、

はた何事の爲にてもあれ、彼、一度發進せんか、右顧左眄をなさず、驀地に直進す、而して困難に逢

へば、爲さざるべからざる底のことを想ひ、危險來りて一命に及ぶときは、生かさざるべからざる底のことを想ふ、又危難の淵に臨まば、先づおのが魂を彼岸に投じて勇進す、

斯くの如く、大丈夫は克く堅忍持久、前進不退、直立不動にして、逡巡怯懦を許さず、自ら信ずることと厚く、優柔を去り、貫徹せずんばやまず、これ彼が忠誠なる所以なり、

大丈夫の名譽はげに斯くの如し、

大丈夫は勇あり

大丈夫は現實の生を肯定するが故に勇あり、彼は善きものが自づから榮えゆくが如き天上界の夢に生くるものにあらず、泰然として眞實に立脚し、現實界には破壞を目的となす危險物の存在せるを知る、彼は知る、總じて生命あるもの、存在の價値あるものは、たゞそが戰ひつつあればこそ存在し生成し存續するものなるを、

大丈夫は勇あり、現實の生を肯定し、あるがまゝの生を、危險を孕める生を愛するが故に、大丈夫は勇あり、善事を助くるが故に、善事を助くるとは戰ふが謂ひなり、

戰ひを否定する者は、人生を否認するものなり、有害無益の者どもよ、命を惜む卑怯者どもよ、汝等が戰ひを回避するは、薄志弱行なるが故なり、逸樂に耽溺せるが故なり、又魂底に己が一身よりも更に尊き大我の存するなきが故なり、この徒輩は永久に戰々兢々たり、邪道に生き、曲路を歩み、眞理を厭ひ、不遜にして強者の勝利を嫉妬す、

勇者は戰ひを肯定し、不安を超克し、自ら持するに嚴、斷じて降服を知らず、おのが生命よりも更に尊きあるものによつて靈感を得、惜み憚るところなく、身命を抛ちて難に赴く、

危險に直面して胸中勇氣滿々、魂の深底に名譽を奉持す、これ勇者が威儀にして、その信條に曰く、

「勝利か、死か」と、

なすが故に、

大丈夫は外面の權力に於ては失ふ處あらんも、内なる力量に於ては增大す、外觀を損ぜんとも本質に於て得るところ有り、憂ひと惱みは益々彼を重厚大度ならしめ、失望は益々彼を賢明ならしむ、又迫害にあつて克く忍耐を學ぶ、目に見ゆるものに於て放棄するところあらんも、目に見えざるものに依つて之を奪還す、よし、生活の爲に何物を奪はるることあらんも、何人も奪ひ能はざる所に於て富を增大す、かくて死來りなば、彼克く不死不滅の偉業を完成せん、

大丈夫は大信念を有す、彼の輝きは、之を曇らさんとするものよりも更に强し、彼は實に星辰の如し、暗雲もその光輝を蔽ふ能はず、又其の軌道は、天地を一體に保つところの大いなる法(のり)によつて圓行成就す、

大丈夫は運命よりも更に强き力を有す、神より發し、克く運命を支配する所の力を有す、

神の國士

大丈夫は神に依つて確立し

その信仰を恥ぢず、

神を敬遠し、神を談ずることを憚り、さては我が身の神に近きことを、我と自らに對してさへも恥づるの徒輩多きこと、今日の如きはあらじ、

此等の徒は、靜肅謹行以て聖事を守らんずる所の、敬神の念の爲に沈默するにあらずして、女々しき者よ、さては弱き者よと呼ばれんかとの不安より、然するなり、彼等の恐るる處は、神は女子供、弱者、老婆なんどの拜むべきものなりと説く徒輩なり、此以外にも、神に對して全く心を閉す者あり、或は神前に立ちて自尊心を喪失せんことを懸念して、自ら神性に近づくことを忌憚する者あり、

此こそ、純然たる未熟と不遜と錯亂以外の何物にも非ず、そは怯懦なり、我等すべての內に生々活動し、彼等たりともその聲を明かに聞きつつある處の、かの金剛力を正視し、之に隨つて行ふ處の、勇無き也、

かくては遂に彼等の上に大苦難到來し、運命は一切の反抗と自惚よりも更に強化し、人間は完全に無力無策となり、爲すところを知らざるに至るべし、この期に臨んで倉惶として走り來りて神を求め叫び、あまつさへかくも長く神より遠ざかりゐたることを忘れ、果して、若し彼の叫びに對して神が直ちに耳を藉さざることあらんか、遂に天を恨むに至らん、

大丈夫は神を信ずることを恥ぢず、彼は自己の神を有し、他人に對しても銘々各自の神を認む、大丈夫は神に就て多くを語らず、されど神を有す、盛運時にも衰運時にも、大丈夫は常にその魂の内に、何物にも優りて確かなる力として神を奉持し、困難に際して始めて走り來り、ああ愛する神よ、助け給へと喚ぶが如き醜態を演ぜず、彼は神を旣に豫め有し、又常に有す、神を座右に有し、心中に有す、神の力は彼を新鮮、明朗、生氣潑剌たらしめ、彼に眞劍味と心眼を與へ、一朝事有らば苦痛に耐へ、難關を克服し、名譽を保全し、國に奉仕せしめて、かくて利害を超越し、權勢を憚らず、生死をも恐れざるに至らしむ、

偉なる哉、神を有する者は全世界に獨立せり、彼こそは毅然として自己の核心に立脚し、如何なる時も端然として亂るることなき向上生活を持續す、

大丈夫は神を體驗せり

卽ち彼は、神を單に聞き傳へのみによつて知れる者に非ず、

ただ神を體驗せる者のみ、衷心より神の何たるかを知り、從つて神に就いて談ずる資格を有す、全心全靈を擧して神に趨向せる者にして、始めて克く神を眞實體驗するを得べきこと、論を俟たず、

さて徒輩有りて曰く、全心全靈を擧して神に趨向なす時にのみ神の體驗有りとせば、そは單なる妄想に過ぎざるべしと、

大丈夫は斯くの如き詭辯家の爲にその敬神を亂さるることなし、

凡そ物は、我らが之に全身を打込み、之に相應はしき如く對處するとき、始めて我が眼前に物々現成するに非ずや、色は聞くべからず、音は見るべからず、生あるものを死せるものとして取扱ふとも、之を識るべからず、又人間を動物視なすとも、人間を識るべからず、色と音と、物と人に就いて然る如く

神に就きても亦然るなり、卽ち心も靈も神ながらに神に趨向するときにのみ、神は我等に現成す、眼は色と形を求め、耳は音と歌を求め、又魂は實に神を求む、かくて我等は、わが身が神に依つて觸れられ、惹き寄せらるるを感ず、

されど是のみにては未だし、神によつて觸れられ、惹き寄せらるるは、恐らくは萬人亦然りなん、されど其のみにては未だ神を體驗する能はず、況んやその魂を神に對して閉せる際に於てをや、人その胸襟を餘す處なく開き、胸中なる神性を解放して神に嚮はしめ——恰も眼を開きて森羅萬象を寫すが如く——又中途半端ならずして徹底的に神に趨向し奉るとき——此の時にこそ人始めて神の實體と靈驗を內よりして體驗し、而して神の金剛力たるを知らん、

多くの者は神を求むれども

神を見出す能はず、その咎は人間自身に在り、神は常に用意あり、されど人間は然らず、

神は遠きに在り、神の惠みと怒りは我等の動かし得る所に非ず、などと說く徒輩を信ずることなかれ、實は決して然らざる也、

神は常住我等が座右にましませば、我等が神を識ると識らざるとは、懸りて我等自身にあり、

神は遠きにあらず、又よそよそしきものに非ず、ただ我等が神より遠ざかり、緣なき他人と成り果てしときに、己が心より然く思ふのみ、盡し心、神に近からば、神亦近くおはします、然り神はおはします、而して父の威嚴、母の慈愛の如く助け給ふ、ただ我等に赤子の如き信賴無かるべからず、

神の戶を永きに互り鎖せる者、之を一擊にして破らんとするも、爲し得べきに非ず、此の事たるや、準備なくば爲すべからず、神に叫ぶ魂の聲は純情ならざるべからず、利己と我執を離脫せざるべからず、

然る時、その聲は神に達せん、

大丈夫たるものは、願掛けに日を曠しうすることなく、寧ろ我身と己が希望とを擧げて無條件に神に委ぬ、斯くも親しく彼の心は神に廻向せるが故に、彼と彼の本願と神とは全く一つに融合ひて、さながら三者一體なるの觀あり、而して假令苦難如何に大ならんとも、彼は釋然として知る、神は必ずや善處し給はんことを、

如是なる時、神は大丈夫とその日常生活との內部に入りて、堅固たる地盤と成る、神は彼の內に在りて靜寂として働き、叉歡喜として働き、事物の本質を洞察する心眼として働き、叉明かに善惡を辨別する良心として働く、神は彼の內に在りて曇りなき確信として、大いなる愛の力として働き、叉彼の心中と座右に存在し、彼と神とに所屬せるものを守護し、之を神ながらに修理固成せんとする金剛不拔の意志として働く、

萬事悉く神より來ると云ふは眞にあらず

惡は神より來らず、寧ろ神に對立す、腐敗と野卑と、本質實相に對する嫌惡とは、神より來るものに非ずして、却つて神に對する謀反なり、又その本質神に出づるものも、その外見に於ては湮滅腐爛し、遂にその內部なる神像と神的核心とを見出し難きこと多し、さりながら凡べての事物の內に神的核心を發見し、且つ之を意欲することこそ肝要なれ、而して大丈夫は實に是を目指して努力す、

不完全なるものは神より來らず、されど不完全を認識し、之に挑戰して打勝つところの力は神より來る、神より來れるものは再び神に歸らんことを願ふ、是卽ち自己を完成せんと願ふなり、而して我等自身も神より出でしものなれば、この自己完成を行ひ、これに依つて神に奉仕すべきなり、

大丈夫は何事が神より來り、何事が然らざるかを知る、そは彼自身神に立脚し、神を意欲し、神のみもとより世界を望見するが故なり、かくて彼は善惡の別を辨へて誤つことなく、之に則つて行動す、

大丈夫は已れの爲に求むる處なく、ひたすら奉仕を行ふが故に、自在に斯く行動し得る也、腐敗と野

卑と墮落と虚榮に對して、大丈夫は勇戰敢鬪す、而して神と國の爲に威義を保ち、高貴を守り、健康を護り、至善に止まる、生くとも死すとも、勝つとも斃るとも、

恰も呼吸が善なるを入らしめて惡しきを吐き、然も斯く爲さざるを得ざるが如く、此の破邪顯正の戰ひは彼が天性の發露なり、

世界は不完全と

無智盲昧と惡業に横溢せり、斯かる時節に於て、單に淸純穩和なる心にては事態を變ずる能はず、醜惡は善良を以つては打敗るべからず、寧ろ憤然たる意志と火と劍を以つてすべし、さてこの至剛の意志と至純の火焰と降魔の利劍は、實に神より大丈夫に降したまふところなり、

彼が創造の正行を以つて建設せしもの、或は神が彼に委ね給ひしもの、即ち遺產と鄕土と職分乃至事業とが、無智盲昧と我慾と怠惰と惡業の爲に破壞腐爛せしめらるるを袖手傍見するは、大丈夫の到底忍ぶ能はざる處なり、この時怒り彼の心頭に發し、千早振る神の荒魂の如く大威力として激發す、

この時靈魂より發する火焰は、雲間を破る電光の如く純粹なり、而して神ながらなるものの爲に戰ひて、神意を挫かんとする諸々の勢力を打倒せんとして、燃ゆる神秘の火は大丈夫が胸に消ゆることあらじ、

彼の劍は明燗々、百錬銳利、斷々乎たり、そは善事護持の劍なり、而して善事は戰ひて容赦なきこと

を望む、

敬虔なる心は蒼穹を映すに止まる靜水には非ず、寧ろ決然神の定め給ひし飛瀑に入つて奔流し、その重壓をもつて瀧壺を穿ち、岩床の塵芥を掃蕩し去る所の、かの激湍に譬へつべし、

大丈夫より大いなる靜けさ生ず

そは輝きと力に充てる、大いなる秩序の靜けさなり、そは大丈夫が神にその中心を置き、嚴然不動の態度を以つてこの中心に立脚せるに由來す、彼が心底は戰慄無く、彼が意志は動搖なく、又彼が情懷は焦慮の影をだに止めず、

人生の苦難と打擊益〻苛酷に、戰鬪益〻白熱に、人心の動搖益〻大にして、大丈夫の心境彌益しに靜かなり、蓋し外より來る不安は、却つて內なる靜默をいよいよ力あらしめ、この力に依つて何物にも犯さるることなく、依然外よりの襲擊者に對して强味を維持するが故なり、

事態大いに惡化し、擾亂は將に彼の心境にも及ばんとすることあらんか、彼は輒ち內面に向ひ、その心靈の深奧に沈潜す、この內奧に彼の秘鑰あり、

此の處にありて彼はその最深なる中心に自己を集中す、極めて靜肅に打坐し、その心魂を振起し、その心氣を再び神中に鎭む、而して動亂如何に大ならんとも、彼は常にこの瞬間を見出して、萬事を放下

し、肩を垂れ、深く息を吸ひ、この偉大なる中心の力を再び感得する迄は之を熄めず、

この中心の力は彼の爲に靜かなる心境を恢復す、而して彼はこのちからを身邊なる凡べての人々に向つて放射す、

大いなる靜けさよ、それは感覺無き人々の死せる靜けさには非ず、鐵面皮の糞落着きにもあらず、それは逞しく働く自發的躍動力にして、魂を發揚し、本質的なるものに對する開眼を行ひ、心氣を勇猛堅固ならしむ、されば、大小の浮世の嵐もこの勇猛心に當りては、交〻に吹く風の泰山に當るが如く、むなしく却けらるるのみなり、

この不動心の靜より純々乎たる不屈の意志生長す、その核心たる犯すべからず、その方向たる變ずべからず、その力たる敵すべからず——この大かつ美なる氣高き意志は、自己よりも更に大なる生命を愛し、斷じて死を怖るることなし、

さて多くの人々は信ずらん、神の力は

靜中にあつてのみ働き、我等は内心深く省察傾聽することに依つて神を認むるを得べきも、一旦行動に移り、難行苦行を爲すべき場合には、神は既に遠くましまし、萬事は我等自身に委ねられたりと、

從つて多くの人は惟ふやらん、神は靜かなる時の爲のみおはします、或は薄志弱行の病者弱者の爲にのみおはします、されど强志健行の徒には、健康にして力强き者には神は不要なりと、

眞實は、是に異れり、

神はただ靜中にのみ在りと思ひ惑へる輩は、その行藏に信をおくこと能はず、かつ又正道に止まらんが爲には、弱者と等しく强者も神を必要とす、

大丈夫の意志には神宿れり、蓋し正しき行動の中には、正しき靜境に於けると同様に神ましますが故に、而して萬事にして異狀無くんば、止觀と意欲、思索と行業の靜動二つながら直ちに一體を成し、一

つの生ける心によりて統合せらるるなり、

心こそ肝要なれ、心の糧と心の惹かれ行く對象こそ肝要なれ、この內に神宿らば、この心より發する行爲の中にも、靜境と同じく神宿るなり、斯くて神常におはします、大いなる、泰らけき勝利の力としておはします、

神に依り安心を得し者は、萬事を神より下されしものとして堪へ忍ぶが故に、最早行動に出づることなしと言ふ者有らば、そは誤てり――

大丈夫は徒らなる我執の爲に憤ることとなし、されど事一度名譽に關し、國家を危殆に瀕せしめ、乃至は內界外界の神事を毀損する惧れあらば、敢然立つて戰ひ、渾身維れ一劍と化する也、

私一箇に關するに過ぎざることとは、彼之を一蹴す、されど事、おのが生活し信念しつつある所の神の領域に關せば、そは必ずや彼が心魂の中核に透徹せん、而して猛志躍出、己が身を顧みず、行く手を遮る一切の事物を打倒せずんば熄まざるべし、

生は惱みを齎し

何人たりとも之を免れず、大丈夫はこの惱みを試煉として誠忠以て之に當り、よく之を克服す、

運命は大丈夫をも破碎すべし、されどただ一事を爲し能はず、即ち彼が誠忠を挫く能はず、誠忠護持、これ大丈夫が本領なり、而して自分自身と國と神に對し忠誠を守る限り、彼は苦惱と運命に耐ふる力を有す、而して彼が萬事の破碎せらるる秋來るとも、彼が內藏する誠忠の力は、この秋を得て愈ゝ發現せん、

斯くて知るべし、神は運命よりも強く、神への忠誠は、人生の打擊ある每に彌益しに大いなる力わき出づる泉の如きを、

大丈夫は知る、最も深刻なる惱みの中にも、なほ神を認識するを得べきを、如是の時節には、神は汝に一切を求め、言擧げを許さず、事の何故なるかを問はしめず、神は汝を把定して放たじ、ただし汝が自己を閉ざし、己が身を硬直せしめて、自から神の手を拂ひ却くるときは、神と雖も如何とも爲す能は

ず、されど若し汝が神に忠誠を守り、惜みなく懐疑なく神に隨身し奉る時は、汝は苦惱にあつて益〻神を、神の全威力を認むべし、

今は我挫けなんと思ふの秋、正にこの秋に當つて神への節操を守らば、一擧にして汝はあらゆる怯懦を絶滅する新なる手掛りを得べし、

脚下なる大地の消失しつつあるが如き感を覺ゆる秋、正にこの秋にありて神への忠節を守らば、突如として汝は新しき基礎を得、動搖なく確立せん、

心痛甚だ大にして今は絶體絶命なりと觀念せる秋、この秋にありて汝神を離れずば、神は心痛を轉じて大いなる靜寂境と爲さん、新なるもの玆に始まり、深夜に汝は神の扉の開かるるを覺え、光と熱と力の大流は汝が胸中に滲透せん、

要は汝なり、神は常に用意有り、汝克く忠誠を守りなば、神は汝を苦惱より新生へ導き歸さん、されど汝みづから神より去らば、神とても汝を助くる能はず。

苦惱の時に神を求むる者はいと多けれど

彼等は歡喜の時に當り神を思はず、斯かる者は、なほ神の外に立つ者なり、神の内に立てる者は、歡喜の時にありて神を求むること、苦惱の時に劣らず、否寧ろ歡喜の時にこそ、愈〻神を求むるなれ、

言ふ迄もなく問題は歡喜の如何にあり、大丈夫は卑俗なる享樂を悦ばず、而して彼を墮落せしめんとする者どもに向ひては、平然としてその盲動を達觀す、彼何ぞ意に介すべき、如何に强權なりとも、卑俗に發するものは、彼を亂す能はず、

永遠者より來る息吹きを感ずるとき、大丈夫の胸襟は開かる、美しきものに於て、高貴なるものに於て、彼の仕事の祝福に於て、力强く實り行くものに於て、過去より傳はる永續的なるものに於て、總べて然り、而して日務と職分と血族と祖國が彼をめぐりて結成せる連續の環に於ては最も然り、ここに於て森も時計も繩も繪も、神に就きて語り始め、最小の事物と雖も重大となる、整々としてここに在り、成功を收め、向上し行く所のものは、彼を悅ばせ、深き心底より感謝報恩の念湧出し、彼は之を以つて神を抱擁す、

斯の如き歡喜の中にあらば、魂は鎭まり行かん、されど一度行動に移らんか、天地正大の氣は發して彼が渾身を充たさん、

大丈夫の歡喜を見よ、そは我等に神意を指示する光明なり、玆には人間社會に於ける、家庭に於ける、仕事に於ける、苦樂に於ける共存共榮有り――神の御旨のまにまに、彼處には一物あり、一樹あり、一像あり、一行あり――神の御旨のまにまに、――ここに追憶と前進と愛あり、怒あり、生成あり、戰鬪あり――神の御旨のまにまに、――又彼方には外ならぬ彼が最愛のものあり、妻あり、子あり、友あり、國あり、完全に彼と一體となり、正道を行きつつあり――神の御旨のまにまに、――此等一切が彼を悅ばしむ、その喜びや深し、いとも神に充ちて重し、

大丈夫に在りては常に斯くの如し、彼はその歡喜の中に神を有す、蓋し彼の心を悅ばしむるもの――そこに神宿り、彼に力を與ふれば也、

神に生くる者は現實の世界にとりては失はれたる存在なりと

かく考ふるもの多し、又惟へらく、斯かる者は最早何等名譽を尊重することなく、その國を愛せず、彼は孤獨裡に神と語ることに依つて靈魂を救濟せんが爲に、完全に自己の内部に隱遁すと、

眞實は、全く之と異れり、斯くの如く信ずる人々も恐らくは存在せん、されど大丈夫が考ふる所は全く之と異れり、彼の神は大丈夫を現世より逃避せしめずして、却つて之を現世の眞只中に赴かしむ、

我等一度神を全靈もて肯定せんか、内心より湧き出づる金剛力は、奉仕と義務に對する能力を奪ふことなく、却つて之を爲すべき至上の力を與ふ、是實にこの金剛力の神秘なり、

大丈夫の大丈夫たるは、世界の爲に神の働きを行ふが故なり、何人たりとも、神に逆ふことなく隨身し奉りし者に非ずして、永續し向上しつつ後進をして更に强力ならしむが如き偉業を成就せる者は、未だこれ有らざる也、

往々にして人は單なる言語を迷信す、されど言語は問題ならず、言語の背後に潛む金剛力こそ肝要なれ、然り、この金剛力は存在す、不可避的に存在す、而して黄嘴なる爲か、或は慢心せる爲か、この力なくして生存し得べしと臆斷せる者は、己れを欺き、世界と彼の國民を欺くものなり、されどこの力を肯定せるものは、世界、國民、自己の三者を悉く新に得て、その永續的中核を認識し、その本質と根源と方向を感知せん、

心の裡に聞ゆる大いなる聲、そは大丈夫に規矩と指導と根據とを與ふ、汝等、欲するがままにこの聲を名づけよ、我は之を神と名づけむ、而して此の聲は、汝等を現世の外へ呼び出だすことなく、寧ろ現世の中へ呼び入るるなるべし、是即ち汝等を汝等の國の爲の奉仕に向つて召喚するなり、

名譽の士

國士

神に随身するは世界を棄つるの謂に非ず

而して神に忠誠なるは世界を裏切るの謂ひに非ず、こはただ神に屬せざる世界を棄つるを謂ふなり、されど神のものなる莊嚴の世界は、我等之を全靈を以つて愛すべく、如何なることありとも之より去らずして、却つて之を擁護し、現實の中にその本質を發展せしめ、死力を盡して之が爲に戰ふべきなり、

神が我等を世界に置き給へるは、世界を輕侮せよとには非ず、否々、この世界に在りて全力を盡して神の御旨を實現せよとてなり、又神が我等をわが國に置きたまへるは、わが國を輕侮し裏切れよとには非ずして、寧ろわが國に忠誠を盡し、身命財產を抛つて國家を守護し、國に於て神の御旨を實現し、國を榮えしむる爲に我等が全力を傾注し、以つて國の內なる神的核心を、彌益しに逞しく美しく勢盛に展開せしめんが爲にこそあれ、而して厥の道を行ずる處に我等が全幸福籠れり、

如何なる本質と努力とが神より國と世界の中へ入り來れるか、又何が神より來らざるか、之を我等に告ぐるは、我等が胸中なる大いなる聲なり、ただ我等が己の空虛と怠慢を、我欲と驕慢を自己より脫落せしむるを要す、又自己の內部なる孤立分離を打破せざるべからず、我等斯く爲さば、我等を結合せし

むる神來の本質を、我等に依つて一全たらんとする神のみわざに於ても感知せん、されど若し然らずんば、我等この聲を聞かず、或は聞くとも之に從つて行動せず、

大丈夫は此の聲を聞く、又此の聲の力に依り神の國に對する彼の愛慕は彌益しに增大す、されど又世界が神の望み給ふ所と異り、彼の本質と、生成意欲にも相反する時は、苦惱と憤怒も彌益しに大とならん、こは彼の心中に聖なる不安を惹起す、彼は身邊なる國民の有るべき姿と、しかも現實には然くあらざる姿とを感ず、斯くて彼は何處に行き何處に在らんとも、やむにやまざる衝動に依つて改新を行ひ、而して先づ我が身に於て之を始む、

大丈夫の行動意志は

名譽慾より來らずして、己が魂の力より來り、是を保て、これを增せよとて神が彼に委囑し給へることに對する愛情と心盡しとより來る、この愛情あるが故に、彼は自から持するに嚴にして、奉仕して倦むことを知らず、而して忠誠なり、

大丈夫は彼の國に對する奉公人たり、蓋し彼は爲さざるを得ずして奉仕を爲すものなれば、若しこの奉仕が功勞として彼に加算さるることあらば、却りて之を訝る也、

これは又斯く有るべきものにして、僞の愛國者は模範なるが如く自ら裝ひて、單に口頭にて何を爲すべきかを談ずるに過ぎざるに反し、眞の愛國者は言擧げせずして爲すべきを爲し、又眞に身を以て範を垂るるものなれば、吾人は常に是の點に依り國士の眞僞を識別するを得べきなり、

げに祖國は、神より人に奉仕と義務の爲に課せられし地上最高のものなり、この故に祖國は他のあらゆる義務を其自身の內に含有す、

從つてみづから信用すべき良民たるの實を示せる者に非ずんば、何人たりともよき獨逸國士たるの資格あらじ、而して良民たるの實を示すとは、自明なる萬事に就きて然云ふ也、

汝隣人を妬み、又ぬすむ可からざること、人の見ると否とに拘らず、汝が爲すところの總ての事に於て、汝の心を純に、汝の手を清く保つべきこと、善事を行ひ惡事を廢すべきこと、驕慢を去り、汝の矜持を德に置きて、權力に置くべからざること、此等總て、而してなほ此より多くのことどもは、自明なることなり、されど是實行せざれば、汝はよき國士たる能はず、

こは總て極めて自明なり、餘りに自明なるが故に、此の陳腐なる大梁(おほうつばり)を事新しく擔ぎ出す者は、恐らく物嗤ひの種たるべし、されど是を膽に銘ずべし、即ち、その家の住人たちが階上に新に屋を建てたれど、梁木を蝕める腐敗に氣附かざりし爲に倒壞せる家屋の、既に多數に上ることを、

斯かればこそ各人は、先づ自明事を忠實に確保し、その力の及ぶ限り、一歩も之に違ふことを許さざるぞよき、

大丈夫が生活の家は

大磐石の上に立つ、その地盤とする所は神と彼の名譽なり、神が已れと結合せるものに大丈夫は愛をもて奉仕し、力弱りし時は、名譽が彼をして義務を想起せしむ、

大丈夫が身内の爲を計り、その業務を爲し職分を果すは、義務づくには非ずして、之を愛するが故なり、而して國と家、妻と子、職分と業務など、凡そ生活と本質に於て彼と一體なるものに對するこの愛情は、彼を振ひ立たしめ、勤務を勵み艱苦に耐へしめ、沒我的にして獨創的ならしめ、勇氣を振起し忍耐心を强め、進んで犧牲に赴かしめ、以つてその誠忠の根基を固むる所の高遠なる力なり、

然り、斯くの如く彼は奉仕す、彼は愛するが故に之を强制として感ぜず、寧ろ愛情によつて斯く爲さざるを得ざればこそ之を行ひ、又その行ひを樂しむ、而して己が義務たることは、自ら進んで之を行ふ、

然りと雖も、如何なる事に關しても、又如何なる時節に於ても、總て斯くの如くなるにはあらず、彼がわが身に引き受けしこと、或は已れの身内の奉仕者として、又已れの國の男兒として、勞働者として、

或は兵士として、彼に課せられしことの中には、彼の希望に反して、更に困難に更に苛酷に成り行くことも多かるべし、斯る時に呪ふとも罵るとも、假令衷心より然なすとも如何ともすべからず、この秋に當つて倚むべきは、ただ心中の偉大なる守護者たる義務の念あるのみ、義務の念は彼を弱氣と動揺に對して强固ならしめ、彼に警告を發して爲すべき任務を遂行し、一旦着手せしことを完遂せしめ、奉仕に於て懈怠無く忠誠以て一貫するに至らしむ――神の爲、彼が名譽の爲、彼が國の爲に――

大丈夫は平靜なる自覺を有す

そは確乎として左右に動揺せず、蓋し彼の自覺は、彼が他人の間に有する變轉極りなき人望より來らずして、專ら彼自身より來るものなるが故なり、彼はおのれの何たるかを知り、又おのれが何を爲し得るかを知る、他人が彼に就きて如何に考ふとも、彼は殆んど之を意に介することなし、但し、彼が敬愛して、心より指導者たり龜鑑たるべき人物なりと是認せる人々ならば格別なり、

大丈夫は矜持を有す、されどそは彼が他人に對して有する權力より來るものに非ずして、寧ろ彼が正義を望み名譽を失墜することなく、主宰神一人を除きては彼の魂に對する審判者を承認せざるが故に然るなり、彼は自己の有りのままの面目と能力を誇り、神聖なる傳承と、自力にて得し所のものとを誇り、彼に委託されし義務を誇り、彼が忠誠を盡す所の主君を誇る、然れども單なる私我と誤れる要求より來るところの虚榮は、彼にとつては無關心事たり、

大丈夫は誤れる功名心を離脱せり、彼は有りのままの自己の分に過ぎたりと思はるることを希望せず、從つていつわりの外見が馬脚を現はさんかと戰々兢々たる不安も、彼の與り知らざる所なり、

大丈夫は生活上の嫉妬を知らざれば、彼以上の人格と彼以上の能力を有し、恐らくは又彼以上幸運なるが故に立身出世せる人々を、嫉妬に驅られて貶すが如きことを爲さず、大丈夫は彼に定められしものを受領し、この上に建設す、彼は彼の道を進む、直道(ひたみち)に着實に進む、彼は風向き次第に小旗を揚ぐるが如きことを爲さず、彼は一度誓約せる旗印の下に立つ、然もこの旗印を生命を賭して擁護す、斯くの如くにして彼はその國に奉公す、

然り而して、これ實に大丈夫が矜持なり、

大丈夫は正心誠意奉公す

大丈夫の事を爲すや、その事自體の爲と身內の爲にはなせども、自分一箇の爲にはなさず、己れに委託せられしこと、卽ち職分と仕事に彼は專念す、而して人の爲を思ひて、我が身を顧みることなし、彼を推進するものは愛、彼を保持するものは名譽、而して人望と權力に對する卑劣なる名譽慾には非ず、

彼の職分は彼にとりては神聖なり、彼は之を注意深く、男らしく、且つ大いなる忠誠を以て實踐す、彼は之に一指だに觸れしめず、一旦おのれに委託されしことは、之を全力もて護念す、而して彼が自己投入の徹底せる、恰もみづからはその奉仕する全一體の單なる一工員に過ぎざるが如し、

斯くの如く職分と仕事に從事し、要務の爲又他人の爲に生活する者は、大いなる靜けさと大いなる力を光被す、こは彼が些細なる刺激に依り自己を分散せしむることなく、又中途半端なる爲に散漫に陷ることなきが故なり、彼は一旦行ふ所のことは、之を徹底的に行ふ、戀愛と事業をなすに當りては、全人格的にして分散せず、斯くて彼はその全力を擧げて自在に奉仕し戰鬪す、

大丈夫の國に立つや、げに斯くの如し、

彼が何物かを他より求むる時は、人は彼の意圖の公平無私にして、已むを得ざる必要の爲に之を求めておのが爲に求むるものに非ざることを感得し、信賴して彼が求むる所に從ふ、

されど官職と美名を濫用して私利私慾を遂げんとする者は、假令勢力を增さんが爲にのみ然なすと雖も、自國に對して不忠不義を行ふものなり、

大丈夫は敢然立ちて

正義と認めし所を擁護す、彼は或は失ふところあらんかとの杞憂の爲に、己が意見を主張し得ざる優柔不斷の徒輩を輕蔑す、或は眞實に生きんと欲し、又眞實を發表す、事苟も正邪に關せば、彼は怯懦逡巡せず、彼は自己の名譽が命ずるところの法を知る、この法は萬事に就きて、特に己が使命と職務に關する場合に於て、潔白と誠忠を要求す、

上官の爲さんと欲する所よりも若干異れる方策を採らざるべからずと考ふる時は、彼は之を公然と上官に進言す、其にも不拘、上官が之を命ずる場合には、彼は一兵卒として服從をなす、さりながら彼は黑きものを白し、白きものを黑しと報告するが如きことなく、上官の意を迎ふる報告を爲さずして、眞理に基きて報告す、かくて彼は從順なるとともに卒直なることによりその誠忠を披攊す、

おのれよりも弱きか、又は下位に在る者に向つては己が權力を臭はせ、上に向つては猫撫で聲をいだし、鞠躬如として御用を相務め、好言令色、常に唯々諾々たるの徒輩は、是即ち小人なり、

大丈夫は服從を行ふ時も克く毅然たる態度を持し、命令を下す場合にありても克く敬虔なり、好言令色は大丈夫の不名譽とする處なり、又彼は已れに從ふものを庇護す、彼はその部下を見殺しにすることなし、

大丈夫は獨立の立場にあつて決斷を恐れず、又その結果に對して責任を執る、事態重大化せる際にも責任を回避せず、否寧ろ正に斯る時にこそ自ら進んで責任を負擔す、彼は自若として其の責に任ず、蓋し自己の爲に何等求むる所なく、只々奉仕を事とする者なるが故に、

斯くの如く大丈夫はその職分を奉行し、兵士として服從し、眞理を信奉す、又忠誠を盡すに當りては常に勇有り、毅然たり、又自在なり、

大丈夫は善良なり

彼は溫き心を有し、おのが好人物なるを恥とせず、さりながら彼の善良さは弱氣より來るにはあらで、彼自身よりも更に大なる力より來る、

善良さは强志力行と兩立せずといふ者あり、實際は然らず、彼等が謂ふ所の善良は僞りの善良なり、意志を弱むる愚痴めきし善良なり、又その强志と云ふは誤れる意志なり、善良性を維持する力なき利己的意志なり、

蓋し、單なる弱氣と恐怖の爲に戰ひを厭ふが故に、其丈の故を以つて善良なる者の善良は、腑拔けの別名なり、そは愚痴柔弱にして、神意遂行の躓きの石たり、

局外に立ち、共同體に就きて何等與り知らんと欲せず、要務を忘れ專ら權力をのみ問題とする者は、その意志或は强固なるべきも、心なきものなれば、また邪惡なりと云ふべし、

されど柔弱の善良と正しき善良と、邪惡の意志と正しき意志とは、全く別物なり、何等關係を有せず、

心と意志とは、正常なる狀態にありては相提携す、即ち善良なる心と正しき意志とは常に協力す、蓋し善良なる心は善なるを欲する意志の力より出づればなり、

大生命の爲に、生命を墮落腐敗せしめんとする者に對抗して自身戰ひつゝある者のみ、自己と等しく正しき生活の爲に、惡と不幸に對し、運命と苦難に對して戰ふ人々と共鳴す、又斯る者はこれ等の人々を放置傍觀することなく、爲し能ふ限りは之を助く、彼が善良なる所以なり、

此の善良さは正しくむすばれし心の力とその自在なる働きより來る、そは大生命、即ち彼を他の人々と結合せしむる民族精神が、懶惰と我慾に依つて閉塞せらるゝことなく、彼の內にありて自在に働き、愛情として滯りなく流露することに由來す、

この愛情によつて彼は一體感を味得し、善行を爲すにも之に從つて爲し、血の力に依つて行ずるなり、斯くの如く大丈夫の善良は戰鬪力を奪ふ所の柔弱に非ずして、正しき戰鬪力を與ふるあたたかき源泉なり、そは善なる生存鬪爭の團結力なり、かかる善良は亦無私にして、克く意志を强固ならしめ、心情

大丈夫は山嶽の如く嵐を衝きて立つ

問題は、嵐の襲來に際して人如何にありやに在り、平和時なりとせんか、有能振りを發揮することも易し、萬事を白日に暴す所の試煉の存せざるが故なり、されど大嵐に逢ひては諸事露見すべし、諸事悉く脅威を受け、萬物直ちに上下顚倒する所の時節到來す、然る時萬事の消長は懸りて、善事を單に知るに止らず、全心全靈を擧げて善事に徹底し、冷靜なる頭腦と熱烈なる心膽もて、生命を賭して之を護念する人々の雙肩に在り、

嵐來る、汝等耳を鐵となし、心を確かに掌握せよ、汝が生命よりも上位に置くところの事物を、一心不亂に心中に確保せんか、何ものも克く汝を搖がすなけん、ただこの今に當りて柔弱に流れ、混亂に陷るが如きこと勿れ、今はその秋なり、今や全心身は汝を結合せしむるものにより滿々と充ちあふれざるべからず、假令他の一切が沒落せんとも、このものは永續せざるべからず、全心全靈、ただこれ、このものを困難の時代を通して護り拔かんずる意志、人は斯くあらざる可からず、

心神を統一せよ、よし汝中道にして斃るとも何かあらんや、我々にとりて生命にもまして尊き者よりは、寧ろ我が身を獻げなん、汝この事の爲に死せんか、汝自身よりも更に偉大なるものを汝は後世に留めん、されば汝の生は徒生犬死に非ず、

大丈夫は山嶽の如く嵐を衝きて立つ、國にして此の底の英傑彌〻多在ならんか、その國力彌〻大ならん、

彼等は毅然として父祖の遺業と將來の目的の上に立脚し、平靜なる手と不動の志操をもて民を導き、苦難を切り拔けしむ、

國難來りなば

汝は平時愛せる所の萬事を放下して兵士たれ、

今や汝が眞に國士なりや否やを證せざる可からず、

今や汝より大火焰を發し獨逸國を欲せざる萬物を燒盡せざるべからず、ただこの「國難」の一事を知れ、

今や全體を思へ、小事に當つて本領を發揮せよ、戰友に信あれ、我が身を顧みる勿れ、

萬事に聾なれ、萬事に盲なれ、萬事に嚴なれ、この國難と係はりなきことに對しては、晝も夜も、ただただこの一事を思へ、感ぜよ、憂へよ、曰く、我が國は國難なり、

今や中途半端は有り得ず――今や徹底と奉仕あるのみ、されど平時なみの奉仕にては、今は既に不足なり、今や非常の御奉公を爲すべし、假令力の有らん限りを越ゆとも、

今や緊褌一番せよ、懶惰と弛緩と散漫とを、汝の內に有りし限りを、放擲すべし、今や國家存亡の秋なり、汝の國は國難なり、

今や平和生活の些細なる心配苦勞に心を煩はす勿れ、今や心と意志はただ一事を容るる餘地を存するのみ、曰く、我が國は國難なり、

拘斯くて國難は汝が心中に燃燒し、汝が志を正し、汝の內なる一切の力をして——識ると識らざるとにらず——ただ「國難」の一事をのみ求めしめずんば熄まず、

汝獨逸人なりや、はたまた獨逸人ならざるや、汝獨逸人なるに非ずや、然らば乃ち汝は時々刻々、一日一日、怠まず弛まず、右顧左眄することなく「我が國は國難なり」のただ一事を意識し、「國難は克服せざる可からず」のただ一事をのみ欲し、而して「此の國難は必ずや克服せらるべし」のただ一事をのみ知れ、

戰場に在りては大丈夫はただ一つの尺度を知る、そは即ち死也、死を以て測らば一切の犧牲は小なり、生き永らへてあらむ限り、大丈夫はなほ捧ぐべき多くを有す、我生き殘りてありと思ふだに、彼は矢も楯もたまらず、益〻顧みなく獻身し、斃れて後則ち已む、

愛は彼を支へ、怒りは彼を進ましむ、而して鐵石の意志を固め、あらゆる犧牲を覺悟し、斯くて彼は戰場に立ち、祖先の遺業を遂行す、

冷靜の眼をもて彼は死を正視す、蓋し彼は生命を最後の御奉公の爲にささげたるが故に、何ものも最早や彼を驚かす能はず——げにや、

獨逸國は生きざるべからず、

汝は獨逸人なり

汝の中にありて、獨逸的なるもの生きんと欲す、汝を通じて、獨逸的なるもの持續し生長し向上せんと欲す、

汝は單なる汝ならず、汝は汝一箇の存在に非ずして、汝の內と周圍に、汝の前と後にある所の、獨逸的なる總べてのものの爲の存在なり、

汝の本質は獨逸的なり、神聖なる獨逸的本質なり、汝は之に、汝の一切の存在と行藏に於て義務を負へり、

汝の職分は獨逸民族の中に在り、神聖なる獨逸民族の中に在り、汝は之に、汝の一切の存在と行藏をもて義務を負へり、

而して汝の主なる神は汝に語るに獨逸語を以つてし、汝は神に語るに獨逸語を以つてす、而して神の

汝に望む處は、汝が汝の人間性の完成を獨逸人として行ふことなり、

されば、何ものが獨逸的流儀にして何が然らざるかを汝に不斷に語る聲に對して、汝の耳を聴からしめよ、この深き心の聲に耳を傾けよ、外國者流の徒輩に從ふ勿れ、

餘すところなく汝を奉公に沒入せよ、愛に、仕事に、又職分に徹底せよ、汝の身を顧みる勿れ、汝の祖國を思へ、是に汝が一命を獻げよ、

而して神に隨身せよ、神は汝に力と憩ひと正しき意志を與へ給ふ、

神に隨身し奉り、名譽に依つて生き、汝の國の爲に戰へ、

斯くてこそ汝は

大丈夫なれ

譯者跋

一、本書はデュルクハイム伯が一九四〇年獨逸に於いて著はされたものである。譯出に際しては種々の方々の御協力を受けた。京大教授荒木俊馬博士は「正義の人」と題して譯された玉稿を、拙譯の爲に提供して下さつた。これは偏へに博士の大度量に基くものである。又六高の先輩同僚麻生教授にも御迷惑をかけた。更に推敲に當つて、橋本文夫氏の御意見によつた點が少くない。特に題名に、「ますらをの道」と假名書きを用ひたのは、大串兎代夫氏の御注意に依る。從つて本書は、云はば一種の合作である。然し、今迄の共同飜譯が糊で繼合せたものであるのに對して、是は一點に衆力を集中して、丁度日本刀を鍛へる樣に、竪横十文字に錬りに錬つた譯なのである。勿論その本槌を握つたのは小生であるが、以上の方々が交る交る向ふ槌を打つて下さつた。謹んで深甚の謝意を表する次第である。

一、天壤無窮の神勅昭乎として、微塵の疑念も許されないのではあるが、我が國が今日千古未曾有の大國難に直面してゐることは、何人たりとも、否定できない。斯かる秋に當つて、我々皇國に生をうける身でありながら、果して十分の覺悟と實行力を有してゐると云へるであらうか。自らかへりみて未だ滿足出來ぬ點が、餘りにも多いのではあるまいか。斯かる反省の資として、盟邦獨逸に於い

て擧げられた、この烈々たる良心の聲に耳を傾けることは、大いに意義のあることである。我々臭國民として、萬一にも他に遲れをとる如きことがあれば、上御一人に對し奉り、相濟まぬ次第である。斯樣な意味に於いて、本書は我々がとつて以つて他山の石と爲すべきものであると信ずる。

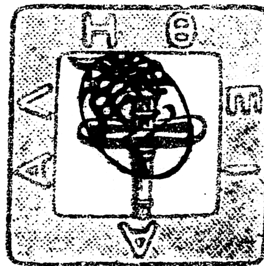
應召の日　　譯者識

ますらをの道

昭和十九年五月十五日印刷
昭和十九年五月二十日發行
一〇、〇〇〇部

出版會承認
う20004號

落丁・亂丁のものはいつでも責任を負ひます



定價 ㊂ 一圓
特別行爲稅相當額 五錢
合計 一圓五錢

著者 藤戸正二
東京都麴町區內幸町二ノ二・內幸ビル
發行者 佐々木隆彦
東京都神田區西神田一ノ四
印刷者 松村保
東京三九九三

發行所 株式會社 理想社
東京都麴町區內幸町二ノ二・內幸ビル
大阪市大淀區長柄中通二ノ一〇
會員番號一四〇五〇八番
電話銀座三四三七(八)番
電話堀川一三四九番
振替東京七八三〇三番
振替大阪六二五二〇番

配給元 東京都神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社